

青 藍

藍野大学年報 2023



藍野大学

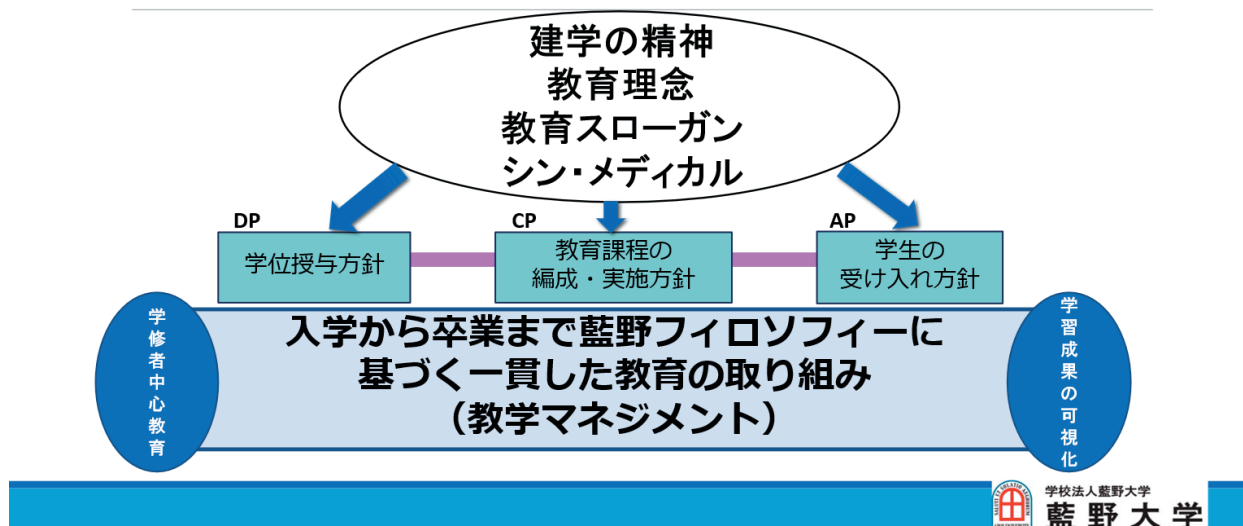
私が藍野大学学長に就任して2年が経ちました。この場を借りて、この2年の大学運営の取り組みと成果について紹介いたします。

1. ミッションの確立

＜建学の精神＞＜教育理念＞＜シン・メディカル＞＜教育スローガン＞をまとめて【藍野フィロソフィー】と名付け、入学から卒業まで【藍野フィロソフィー】に基づく一貫した教育に取り組んでいきます。(図1参照)

＜図1 藍野フィロソフィー＞

藍野フィロソフィー

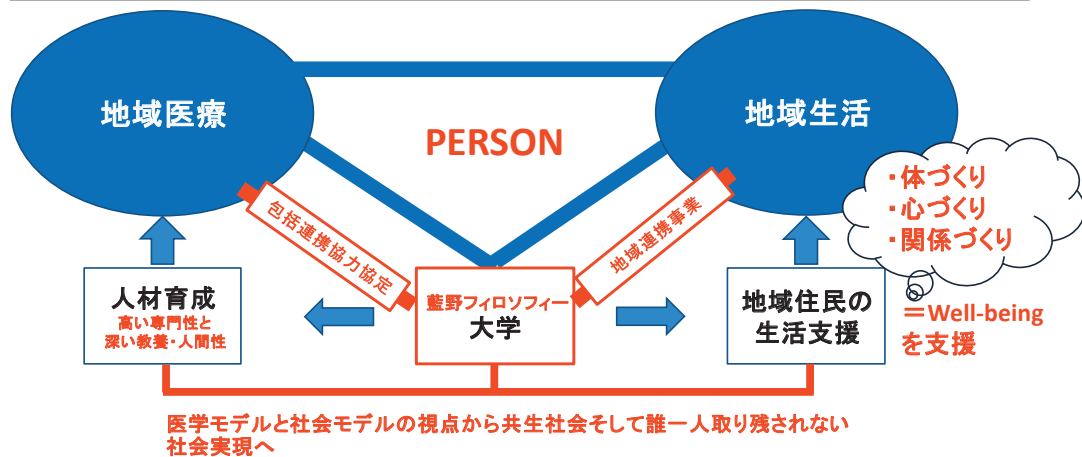


2. ビジョンの確立

超高齢社会の到来・疾病構造の変化により、日本の医療現場は「身体的な治療に主眼を置く医療」から「人の人生・生活を支える医療」へと大きく転換しつつあります。このような社会状況の下で、藍野大学が地域や社会から求められていることは、地域医療のみならず地域生活に貢献できる人材を育成し、地域医療や地域生活を直接支援できるシステムを築くことだと考えます。すなわち、藍野大学が地域医療と地域生活とトライアングルを形成し、「Person」すなわち地域の住民を支援していくというものであり、藍野モデル(図2参照)と名付けました。

<図2 藍野モデル>

藍野モデル



また、藍野モデルを進化させる取り組みのひとつとして、中長期を視野に入れた学部・学科・コースの設置構想を策定しました。具体的には、現在の医療保健学部看護学科を独立させ、看護学部と改組するとともに、医療保健学部の中に健康科学科(仮称)と臨床工学科に1年課程の専攻科を新設するというものです。現在、文部科学省に事前相談提出中であり、順調にいけば2025年には2学部5学科1専攻科の新体制がスタートする予定です。

大学院に関しては、すでに健康科学研究科の設置が認可されており、2024年4月より看護学研究科と健康科学研究科の2研究科体制が始動します。また、2025年以降に看護学研究科に助産師課程と教職課程(専修免許状取得)の設置も予定しています。

3. 大学に求められる4つの力(【教育力】【研究力】【連携力】【募集力】)

まず教育力について述べます。2022年度国家試験は卒業生1名以外全員合格となり、全国的に見ても非常に優れた成績でした。特に理学療法士国家試験では、全国3位となる88名の合格者を輩出し、看護師国家試験では、2年連続100%の合格率を達成しました。

また、2022年度私立大学等改革統合支援事業「タイプI Society5.0の実現等に向けた特色ある教育の展開」を初めて獲得することができました。

さらに、大学基準協会による2023年度大学評価の結果、適合しているとの認定を受領することができました。

次に研究力については、科研費配分額ランキングにおいて私立大学約560校中2022年281位、2023年239位と着実に順位を上げています。特筆すべきこととして、科研費で採択された研究の女性研究者比率において、国公立を合わせた全大学中で第2位となりました。我が国において女性教員、女性研究員の増員が喫緊の課題となっている中、本学の高い女性比率は教育・研究分野のダイバーシティを象徴する事例として各方面から大きな注目を集めています。

連携力については、京都・大阪を中心とした2つの医療法人と7病院と包括連携協定を締結し、地域医療のネットワークの構築を目指すとともに、医療人材の育成と医療の発展に寄与することを目的としています。高大連携では8校の高校と高大連携協定を締結し、幅広い学びの場の提供と相互交流の活発化に努めています。

最後に募集力についてですが、18歳人口と医療職志望の学生数が減少しつつある現在、募集力は大学存続の成否を分けるきわめて重要な要件です。充実した教育・研究体制を確立していても、募集力がなければ大学は競合のスタートラインに立つことができません。教職員の皆様の協力と努力の賜物である「教職協働」により、2023年新入学生は1.06倍確保することができました。しかし、今後、本学の募集をめぐる状況はますます厳しくなると考えられます。今年度は「募集力強化」が大学の最重要課題だと考えています。大学一丸となって、多彩なメディアを通じた情報発信やミッションである「藍野フィロソフィー」、ビジョンである「藍野モデル」を基盤とした学部・学科の新設等募集力の強化に向けた取り組みを推進していきたいと考えています。

文部科学省は、2030年の18歳人口を約103万人、2040年には約88万人と試算しています。今後、藍野大学の運営環境は一段と厳しいものとなることは間違いありません。藍野大学は常に変わり続け、進化し続けなければなりません。2024年は変革への意思を明確化したキャッチフレーズ―「Transforming Aino Blue」変革する藍野大学―を掲げ、教職員一同前進していきたいと考えています。

藍野大学年報 2023 の発刊にあたって 私の研究の歩み ランダムウォーク

副学長 飯田 英晴

立命館大学哲学科心理学専攻に在籍中に会った臨床心理学の本に「病棟内適応評価尺度」について紹介した頁があり、それは、なぜか運命的な出会いでした。乏しい英語の能力で入院中の精神疾患患者さんの行動のリストを訳出し、K 大学精神科の教授にお会いして、K 大学精神科病棟で行いましょうと言うことになり、半年以上ほぼ毎日、精神科の病棟で患者さんの行動の観察が始まりました。この行動評価を分析し、卒業研究にすると共に、精神科の専門雑誌に投稿、掲載されました。

このような縁もあって、K 大学精神医学教室の研究生として 2 年間在籍しました。その間、外来患者さんの心理学的評価をはじめ、自閉症児のプレイセラピー、母親の面談などを行い、医局には机はなく、病棟内の脳波室に机をもらい、脳波室の住人になりました。脳波検査の患者さんがいない時は研修医から脳波のことだけでなく、精神医学全般、神経学のことを広く学ぶことができ、貴重な時間でした。脳波の研究もこの部屋のお陰です。

2 年経った時に、今度新しく滋賀医科大学ができるので、どうかという話が来て、公務員の中級試験を受け、何とか 4 月から文部技官として任用してもらいました。まだ病棟は開かれてなく、医局はただ部屋があるだけで、机 1 つありません。病棟を開くための準備、外来で必要な備品の調達、医局で必要な物品の購入など雑用に追われる毎日でした。

10 月にやっと病棟が開かれ、耳鼻咽喉科と 60 床を分けて使う形で、何かと不便を感じました。脳波の研究グループに入り、脳波を使った脳内情報処理に関する研究で、通常の臨床脳波記録の数倍以上もの精度で電極を頭皮に着けるのが至難の業でしたが、持ち前の手先の器用さもあって、電極付けでは重宝してもらいました。その当時はまだ、パワーポイントのようなソフトはなかったので、学会発表のスライド作りは私の担当で、脳波のトレースやグラフ作りは烏口を使ってすべて手書きで作っていました。

睡眠時無呼吸症候群や REM 関連睡眠時異常行動の患者さん等の終夜睡眠脳波記録も徹夜で行い、この時の経験が、睡眠と成長ホルモン、プロラクチン分泌パターンとの関連の研究や高齢認知症患者さんの睡眠研究に大いに役立ちました。また、この時に、厚労省の研究班の班員になり、マタニティーブルーについての臨床研究を大阪助産婦業務研究会の人たちの力を借りて、千名以上の産婦さんからデータを得て論文にまとめました。

医局の事情で、脳波グループは解散され、メンバーはそれぞれ大学を離れバラバラになり、私はどういう訳か医局に残され、睡眠と内分泌の関連、睡眠物質の研究グループに吸収され、今までにはないスタイルの研究に入りました。これもまた、新しい刺激があって、面白みを感じました。良き友にも恵まれた時代でもありました。

滋賀医大を辞し、東京の国立精神・神経センター武蔵病院に移りました。元々陸軍病院だったこともあって、余りの旧態然とした態勢に驚き、ひたすら入院患者さんの臨床心理検査をしました。依頼伝票の古いものから検査をしますが、既に死亡退院の患者さんで、検査が酷く滞っているのに驚きました。僅か 1 年で辞めましたが、溜まっていた依頼伝票は全て片づけました。睡眠相後退症候群についての論文、アルコール依存症の高次脳機能検査についての論文などをまとめました。

埼玉医科大学の心理学教室のポストが空くので、行かないかという話があり埼玉医大に移ることになりましたが、いざ移ってみると、学生相談と精神科助手のポストで、「話が違うなあ」と思いながらも、新天地で大学院生の研究指導、性同一性障害の患者さんの評価と慢性統合失調症患者さんに対する社会技能訓練 (SST) など

に携わりました。認知症患者さんの重症度と睡眠構造との関連を分析し、認知症が重症化し、寝たきりになり、全面的に介助を受けるようになると、睡眠構造も大きく崩れ、睡眠・覚醒リズムも崩れるが、中等度の認知症では、睡眠構造が崩れても早朝の光刺激によって改善する傾向を明らかにし、これが学位論文になりました。終夜睡眠の記録で、体力的にも大変な研究でした。

藍野大学の開設に関わり、ここでは自殺予防戦略研究の班員になり、大阪地区の自殺予防対策に参画し、色々な地域で自殺予防についての講演会、うつ病の正しい理解についての講演などを行って来ました。丁度、立命館大学で講演をした時、そこに来ていた人の悲嘆反応が強烈で、それを機に悲嘆反応に興味を持ち、悲嘆に関する実践研究を始めるきっかけになりました。今は京都グリーフケア協会で、葬儀関係者、看護・保健師、納棺士・死化粧士等の葬祭業者等を対象にしたグリーフケアの講義も行っています。

一つのテーマ、同じ分野を何年にも渡って行うのではなく、その時々、それぞれの場所でできる研究を行うという姿勢でこれまで研究に携わってきました。こんな姿勢で良かったのかなとふと考えることもありますが、もう後には戻れませんから、これでよしとしておきます。研究のテーマになるような素材はその気になって眺めると結構あるものです。若い教育者は研究のテーマを誰かから与えられるのではなく、自らの足で歩き回って(ランダムウォーク)探してみるのもまた、楽しいものです。

発刊にあたって

理学療法学科特任教授 中央研究施設長 副学長 栗原秀剛

藍野大学に佐々木恵雲学長が就任され、新たな改革の動きが始動して 2 年目を迎えた今年、第 3 期認証評価を受診するという大きなイベントがありました。認証評価受審に必要な、自己点件・評価報告書の作成は、昨年春の時点で遅々として進んでおらず、残り少ない時間で対応できる体制の構築が必要でした。そのため、各委員会を整理して認証評価基準の項目に対応した新たな委員会体制を立ち上げ、各委員長で構成される内部質保証委員会(後藤学部長が委員長)が、月に 2 度の会議を開いて、評価基準をクリアするために本学がすべき課題を精査し、改善を実行していくことになったのです。このように、学内の体制が整い、その成果を自己点検評価に盛り込むことで 10 月に行われた認証評価に、無事対応できたことは、奇跡的とも思えるものでした。これを執筆している時点では、認証評価の結果は受け取っていませんが、感触として概ね問題はないのではと感じています。この 2 年間を振り返って思うことは、旧体制では大学内の問題点を委員会レベルでは検討していたが、それを大学全体の問題として捉え、変えていこうとするムーブメントに昇華できなかったこと、委員会レベルで議論されていた問題がトップと共有されていなかったことが大きな問題であったと思います。新体制では決して外部から人材を入れたわけではなく、適材適所に委員長を定め、2 年間で結果を出せたことは、現在の藍野大学の本来の実力を示すものと考えられますが、この変化をさらに次のステップに移し、大学が大きく躍進していくことを願っています。

そのような年の初めには、4 学科のうち 3 学科で新卒業生たちにより、国家試験の 100%合格を達成するという快挙が成し遂げられました。大変誇らしいことです。国家試験の合格率は大学における教育力の良い指標となるため、これから入学者獲得をする上でもっとも重要視されると考えられますので、この高い国試合格率を継続していくことが大切です。

研究面では、文部科学省が行った今年度の科学研究費の助成事業において、採択された研究のうち女性研究者が占める割合が高い大学が報道され、本学が全国 2 位となったことが明らかになりました。今後も本学において働き方改革の一環として女性研究者が活躍できるよう、研究しやすい環境づくりや支援体制の強化が求められることとなります。

大学に進学する 18 歳人口が減少局面に突入していくことが以前より問題となっていますが、本学が「選ばれる大学」になるために、いかに行動すべきか教員一人ずつが真剣に考えること、そのためにはまず学生を大切に育て国家試験に無事合格させることを継続し、魅力のある学科、学部にするための弛まぬ努力を継続していくことが重要です。

目 次

I	大学および学科便り	
	2023 年度の藍野大学医療保健学部の歩み	1
	2023 年度 看護学科の取り組み	
	2023 年度の理学療法学科の取り組み	
	2023 年度の作業療法学科の取り組み	
	2023 年度の臨床工学科の取り組み	
	2023 年度 看護学研究科の取り組み	
	藍野大学 中央研究施設	
	藍野大学・藍野大学短期大学部事務センターの取り組みとこれから	
	中央図書館の役割：市民に開かれた図書館をめざして	
II	2023 年度の出来事	25
	特集 1 2022 年の FD・SD 推進活動	
	特集 2 卒業後アンケート調査からみえたもの(教学 IR 室)	
	特集 3 〈研究紹介〉科学研究費補助金採択課題について	
	1. 学校で働く看護師のコンピテンシーを基にした教育モデルの開発	
	2. 高齢者の抑うつ症状改善のためのナッジを活用した 身体活動プログラムの開発と効果検証	
	3. 地域在住高齢者の転倒に及ぼす筋量・筋力の複合影響についての追跡研究	
	4. 高齢者の握り損ないを科学する ―握る力と腕の力の持続出力調整機能の研究―	
	5. 『宇宙環境における内耳前庭の発生維持とバイオメカニクス』 ―細胞／分子レベルでの力学的特性の解明に向けて―	
	特集 4 看護学科教員による実習施設への研究支援の取り組み	
	特集 5 令和 4 年度看護学科卒業生のための卒業前看護技術演習実践報告	
	特集 6 藍野大学×茨木市南保健福祉センター 共同研究 (活動報告)	
	―中高年者に対する運動継続が身体機能 (骨格筋・呼吸筋) に与える影響―	
	特集 7 ハードシェル静脈リザーバーにおける薬液拡散の性能評価	
	―時定数および薬液濃度比による評価― (藍野大学令和 5 年度優秀研究賞)	
	特集 8 拍動流および定常流脳分離体外循環における脳微小循環の検証	
III	学年暦・学生の状況	63
IV	研究業績と社会貢献	69
	科学研究費助成事業について	
	教員研究業績・発表等	
	編集後記	

